

5年越しの初恋

孤独なバカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校を卒業しバンドをきっかけに芸能界デビューを果たした弥柳銀次は卒業して五年の節目の同窓会に参加するため久しぶりに凡矢理市へと戻ってきていた。

同窓会で初恋の少女に出会い結婚までの道筋を辿る物語である

目次

初恋の思い出	1
同窓会く五年越しの告白	10
都会のファミレスにて	22

初恋の思い出

「初恋ですか？」

「はい。弥柳くんもいくら付き合ったことがないとはいえ好きだった人くらいいるでしょ？それなら少し付聞いてみたいなああって思ってたね。」

と少し苦笑している男性弥柳銀次がテレビ番組の司会から振られて少し困ったように頬をかく。

この男性は恋愛ソングに定評があり新曲の宣伝としてとある音楽番組に呼ばれていたのだった

「……そうですね。僕の初恋は小学生の時同じクラスだったOさんですね。」

「ほう。小学生のころなの？」

「はい。というよりも初恋の時間が長かったんですよね。そのOさんとは高校まで同じ学校でしたから小学生3年生のからだったんで多分九年間くらいですか？まあ同じクラスになったことは高校三年だけでしたからそのOさんも覚えてるか分かりませんが。」

男性は少し寂しそうしている、今や有名歌手でそこそこ顔もいいのでドラマにも出演

していて基本的に陽気なキャラとして出演していたので。

「それは長いですね？告白とかしたんですか？」

「いや。明らかにそのOさんに好きな人がいたんで告白すらできませんでした。もともと恋愛は消極的でしたし、そこまで目立った高校生じゃなかったですから。音楽の時に歌がうまかったくらいの子って思っているんじゃないですか？写真とか見ているもどこにもいる男の子でしたし。」

この弥柳といったように本当に目立った生徒ではない。部活に参加することもなく友達と話し高校三年になってようやく挨拶をする程度の仲になったのだった。

でもそれだけ

今はどこで何をしているか分からない。特に最後の一年は受験勉強に追われて恋愛どころではなかった。

この少年が希望した大学は難易度が高く、この男性は勉強に力を入れていたのだ。

「すいません。あんまり面白くない話じゃなくて。視聴者の皆さんはたとえ報われなくても告白した方がいいと思います。僕はどうしてもその人と比べてしまっただけ。その人以上の人が未だに現れてないんですよ。未だに告白しとかなかったこと少し後悔していますから。」

「……分かる。例え報われない恋でもちゃんと想いは伝えた方がいいわよ。もしかした

らその少女もこの番組見ているんじゃないの？」

「大丈夫です。この放送時間に高校の同窓会がありました。ちよつと特殊で高校中退した人も来るんですけどそれにその人も出席するらしいです。」

「あらく。それじゃあ想いは伝えないの？」

「伝えませんよ。僕もちよつとその人のことは耳にしています。今が忙しい時期になってくるらしいので邪魔をしない方がいいだろうですし。」

と恋愛話で盛り上がるスタジオにスタッフからカンペが出される。もうそろそろ歌の準備に入るのであろう。

「それじゃあ弥柳くん。一言お願いしていいかしら。」

「はい。えつと土曜9時『君が知らない物語』主題歌、『後悔の恋』です。えつと俺みたくに恋愛失敗したとある少年が数十年後初恋を思い出すそんな切ない曲になっているのぜひチャンネルを変えずに聴いてください。」

「それじゃあスタンバイお願いするわ。」

とって男性は出て行く。特別スタジオに向かい歌の準備に向かう振りをする。生放送ではないので一度カットを挟んでから曲に移ることになる。

「カット。はいオッケーです!!」

「…ふう。」

「それじゃあ別スタジオで撮影になります。」

「はい。それじゃあ準備っていつくらいになりますか？」

「後十分で入れますか？」

「はい大丈夫です。少しリハやっていいですか？」

と変わらず笑顔で答える男性は頷くとスタッフと話し込む男性に

「本当いい子だよね。」

「そうですね。本当に変な噂もありませんし、ファンサービスもかなりいいらしいですから。スキャンダルも未だにゼロですよね？今の時代では珍しいですよね？」

「何であの子に恋人ができないのか私には分からないわ。」

と司会の女性とスタッフが話している。大御所と呼ばれるくらい誰もが知っている司会の女性は実はプライベートで夫である音楽プロデューサーと弥柳が仲がいいのでプライベートでも優しい性格であることをしっていた。悪口一つ言わない。聖人みたいな男性って。そんな彼が唯一嫌うことが恋愛目当てで近づいてくることであり実は何人かの女優から紹介してほしいと頼まれているのだが全て断っていることを知っていた。

そしてその少女のことを今でも酔っ払ってから話すこともしっていた。

「……小野寺小咲さんね。……今でも好きなんですって。」

「えっ?」

「あの子が言っていたでしょ? 本人は自覚はないだろうけどその人の話になると後悔しているわ。……夫も言っていたわ。あの子は音楽の才能は本当はないらしいの。でもあの子はずっと一途なの。努力だって怠らないし、声が潰れるまで歌のレッスンをしたこともあるんですって。それは恋愛も同じことでずっと片想いのまま離れてしまったんだって。失恋ソングや片想いの歌を歌わせたならヒットするのは気持ちがい

ることが原因なんだろうってね。」

「そ、それは。」

「あの子も真面目だからね。でも気になるわね。あの子が好きだった小野寺小咲さんって。」

と男性の歌声が聞こえてくる。切なく今にも泣きそうな声が聞こえてくる。その歌声をスタッフ一同その歌声を聴きいつていた。

あれから二週間後その少年は久しぶりに凡矢理市に戻ってきていた。

伊達眼鏡をつけデザイナーに教えてもらった洋服をつけて同窓会の場所へと向かっていた。

「ゴリ沢や集元気かな? あいつら先生になったって聞いているけど。」

独り言をいうくらいにご機嫌である。高校生の頃の友達結構すっかりした就職先や出世している人が多いらしい。

「そっか、あの有名カップルは籍を入れたんだってと近況の報告は怠っていない。」

「そうして向かったのは学校。本来ならホテルでやるらしいかったのだがとある生徒の希望で最初の同窓会はこっちになったのだ。」

「懐かしいそうに」

「実は来週のロケで思い出の地でここにくることは確定なのだが少し感傷に浸っている。」

「母校に来るのはもう卒業して六年ぶりになる。」

「銀次は大学生の時に遊び感覚でバンドをやっていたらスカウトに勧誘され芸能界入り。高校でも文化祭でバンドをしたこともあり元々音楽は好きだったんだけど。まさかここまでやれるとは自分自身でも思わなかった」

「……ありや？ギン？」

「ん？」

「と俺はふと懐かしい声が聞こえて振り返るとメガネのカップル二人が立っていた。」

「おっ!!集。宮本も久しぶり。」

「あら、私のことも覚えていたの？」

「ああ。というよりも集と話す時大体お前の惚気話を聞かされているからな。それに小中高と同じ学校だったしあんまり変わってないから。」

「そつちは十分変わっちゃって。今度のドラマまた主題歌歌うんだろ?」

「ああ。一応新曲のオフアームも来てるし波に乗っているからな。これをどう安定させるか大変なんだけど。」

「それでも立派よ。そういうえば今日も放送なかったかしら。」

「オンスタで一曲歌わせてもらったぞ。まあ元々あそこは準レギュラーみたいだし。」

舞子や宮本と呼ばれて少女はグラウンドのど真ん中で話していると

「あれ?集と宮本と、って誰だ?」

「舞子くんとりちちゃんおはよう。えつと。」

「……あくつて楽、桐崎さん今やオリコンチャート一位が当然の有名歌手の弥柳さん知らないの?」

「えつ?弥柳くん?嘘?歌手になつていたの?」

「まじ?俺全くテレビ見てないから知らなかった。」

「久しぶり。千棘さんと楽。」

銀次がそういうと二人は首を傾げる。

「あれ?お前つて名前呼びだったか?」

「いや今二人とも一条だろ？流石に籍を入れて一条って言ったら名前ややこしいだろうし。」

「あつ。」

すると照れ臭そうに二人は笑う。自然と手を繋いでいるあたりうまくいつていることは見て明らかだった。

「それにしてもつぐみさんはモデルで千棘さんは世界的なファッションデザイナーだろ？俺のこと知らなくても仕方ないけど。……楽が知らないことは結構シヨックだった。」

「うん。クラスの出世頭として有名なんだぞ。多分桐崎さんや誠士郎ちゃん以上に知名度があるんじゃないかな？」

「そうなんだ。」

「そういえば鶯さんはどうしたんだ？今日出席予定だっただろ？」

「鶯？鶯なら今小咲ちゃんと万里花と合流しているわ。」

すると少しだけ銀次の顔が強張る。そして少し暗い顔をしていたのは誰から見ても明らかだった

「小野寺……か。」

「……どうした？」

「いや何でもねえ。それじゃ俺は先にいつているな。流石に一条ハーレムに突っ込んだら悪いし。」

「……久しぶりに聞いたなそれ。」

「じゃあな。また後で。」

といいは強引に離れた銀次。千棘と楽は分からなかつたがルリと集は気づいていた。

「そういえばあの子。小咲のことがずっと好きだったわよね。」

「ああ。あいつずっと裏で楽と小野寺の関係を進むようにサポートしてきたからな。俺たちもあいつには少し謝った方がいいんじゃない。」

「……でもあの子の性格的に絶対謝らなくていいっていうわよ。最後の最後までずっと小咲のことを応援して、小咲の幸せを願っていたんだから。」

「そういうところ小野寺と似ているよなあ。」

と二人はそんな銀次の去った後を見送る。陰ながらずっと小咲と呼ばれる女性を好きだった友人を見守っていた。

同窓会～五年越しの告白

ぼくはどこにもいる高校生だった。

静かにただ歌が上手いってだけのどこにもいる男子生徒

あの当時も今も変わらない。歌を歌い続けている日々

歌うとこんなに切ないと思うようになったのはいつからだろうか？

歌うと涙が出そうになるのは何でだろうか。

歌は好きだ。

歌うのはもつと好きだ。

でも、自分の曲だけは好きになれなかった

「久しぶり。ゴリ沢!!」

「おお。ギンじゃねーか。今日は暇だったのか?」

「ああ。2日間だけ休暇もらったんだよ。来週もロケでこつちに戻るけどしばらくは休みが取れないからな。」

と体育館でぼくたちは久しぶりの再開に盛り上がっていた。

社会人にぼくたちは案外変わっている人が少ないらしい。見ただけでわかる人が結構いるのに加え

「つーかギンがまさか歌手になつていいるとは思ひもしなかつたよな。悪いうちのお袋がファンなんだよ。サインもらつていいか?」

「別にいいぞ。なんて書けばいいか?」

「悪い。えつと文子へつて書いてくれたらいいけど。」

「了解。」

とサインをねだられたり周りでは高校の時ではありえないくらいに囲まれていた。

こういつたファンサービスはするのがぼくが唯一こだわっていることである。

サインは時間があれば断らずに書くことにしているし握手も断つたことがない。事務所への贈り物は断っているけど、デビューしたところはファンレターの返信もしていたことでさらに人気がでたらしい。最近は多すぎて返信はしていないけど全部のファンレターを読んでいる

「そういえば新曲聴いたよ!!切なかつたよね。」

「もしかして実話だつたりするの?」

「いやいや。作詞はボクがやつているわけじゃないから。まあ作曲家と相談して決めているから少しは本当のことも混ぜられているかな?そつちの方が歌いやすいし。」

と女子や男子に囲まれてしまい身動きが取れない。実際こうなるって覚悟の上で来たので仕方がないのだが。

桐崎や橘たちが入ってきててもボクに注目が集まっているのも少しおかしな話だろう。

「あら？どうしたのですか？」

「あく万里花ちゃんは知らなくても仕方ないか。三年生の時に同じクラスだったギンが歌手になったんだよ。」

「ギン？……弥柳か？」

「あら。誠士郎ちゃんは覚えていたんだ。」

「文化祭で二年連続でバンドのボーカルをやっていたからな。宮本様と貴様とも結構仲がよかっただろう。度々話していることを見たことがある。」

すると鶴は覚えていたことに少し嬉しいと思ってしまう。この鶴もボクとはほとんど接点がなかった一人だ。

だから覚えてなくても仕方がないと思っていたのだけど覚えてくれたことに少し嬉しく思う。

「あつ。本当に弥柳くんなんだ。私もCD買ったんだよ。」

すると聞き覚えのある声が聞こえてくる。その目線がその女性の方を見てしまう。

その人は高校の時と全く変わっていなかった。

ショートカットの女子は友達である鶴と宮本の隣に立っていた

「あら、小咲ちゃんも買っていたの？」

「うん。いい曲ばかりなんだよ。どこか切なくなるけど。それでもつい聞き入っちゃうんだ。」

「そう。あなた一条くんに振られたから、それに共感しているんじゃない？」

「宮本。」

「るりちゃん!!」

変わらないな。

そんな声に苦笑してしまう。

小野寺小咲。

ボクが小学校の頃から高校生までずっと好きだった初恋の相手だった。

「………それでさ。」

それでももう終わった恋だ。そう首を横に振ると話を返す。

気づいたらいけない気持ちに気づいているのにそれ。

どこか胸がチクつと痛むのをひたすらに隠していた。

「それじゃあみんなの再会を祝ってかんぱーい!!」

「かんぱい。」

と全員がグラスを持ちボクたちは料理を食べ始める。

このクラスの卒業生で女子の三人が料理学校に進んだためせっかくだし全員で何か作ろうってことになったらしい。

酒を飲みながら一条と集と酒を飲む。

「てか珍しいよな。お前が楽と話しているなんて。」

「ぼくはラスト一年しか同じクラスじゃなかったから。それにあんまり賑やかなのは苦手だし。」

「今芸能界で大活躍している奴が何を言っているんだよ。」

「そういわれると……」

「てかペース早くね？お前。」

「あくボクは酒強いから。それに明日は帰省だけで二日酔いも心配いらないしせっかくだし飲もうかなって。」

と酒をぐいぐい飲む。ビールのほろ苦さで胸の痛みごまかしてしまうのでつい酒進んでしまう。

「そういえば新婚生活ってどうなの？集も宮本と同棲しているんだよね？」

「俺は千棘にあったのは半年ぶりだからな。今だに籍を入れた実感はないさ。」

「俺は逆に結婚について考え始めているかな？俺もルリちゃんも忙しいけど毎日楽しいけどな。そういうギンは？」

「ボクは全く。出合いは多いし飲み会で連絡先交換することは多いんだけどそれでもただにいい人止まりなんだよな。友達を紹介したいって言われたこともあるけど、あんまりそういうこと好きじゃないし。一度つきりで全部断っているよ。」

「お前行き遅れるんじゃない？どんな人がタイプなんだ？」

好みのタイプってどういう風なのかと考える。するとボクが少し考え

「……うーん。それ自分分らないんだよね。なんか理想って答えると初恋の人って答えるのかな。」

「……」

「あんまり恋愛とか得意じゃないから。恋愛してみればまた景色は変わると思うんだけど……」

苦笑いしてしまう。実際ボク自身どういう人と付き合う想像が未だにできない。

ずっと好きだった少女がいて……ずっとその人を未だに想い続けていることなんて誰にも話せない。

そんなことを思っていると

「……そういえば今日って弥柳くんの歌番組出るんじゃないかった？」

「ふえ?」

「久しぶり。弥柳くん。」

「……って小野寺さん。久しぶりだな。」

ボクの隣に来たのは小野寺さんだった。本当に五年ぶりの再会なので久しぶりの再会だ。

「弥柳くんの新曲も聴いたよ!!すごく切ない曲だね。」

「あゝ。聴いてくれてありがとう?」

「何で疑問系なんだよ。」

少し笑いに包まれる。それでもストレートに褒められると少し照れくさい。

「小咲あなたのファンらしいのよ。何回かライブもいったことあるみたいで。」

「へ?」

「ちよつとルリちゃん!!」

「あゝ……なんていえばいいんだろう。……なんか恥ずかしいな。……知り合いがファンってこと自体結構な。」

少し照れくさそうに笑ってしまふ。おそらく顔は真っ赤になっているだろう。

「まあ質問はそうだな。今日の8時からオンスタで一曲歌っているな。土9時ドラマの曲。」

「あつやつぱり。私今日見れないからとっていたんだ。」

「へ〜8時つてことは後少しで始まるわね〜。ちよつと見てみたいかも。」

「私も気になります。」

とすると全員が見たいと言い出すと集が何かをセツティングしているのが見えた。

「ん？何しているんだ集。」

「せつかくだしカラオケを貸し出しておいたんだよ。近隣住民の許可は出しているしせつかくだから歌ってもらおうかなつて。一応アンテナ持つてきてるし。」

「最初からこのつもりだったのか。てか歌の許可は出てるしな。同窓会で歌うくらいなら事務所は何も言わないつて言われてる。」

「ありや。でも新曲まだ入つてないんだろ？」

「入つてないけどさ。……音源持つてきたのにな。」

「案外のりのり？」

「結構楽しみにしてたんだぞ。この同窓会。てかボクにとっては二週間ぶりの休みだし。」

そういうとわあ!!と盛り上がる。ボクは適当に耐ハイの栓をあけそれを飲み始めるとセツティングの合間にテレビをつけ始める。

「……隣いいかな？」

「ん。別にいいぞ。」

小野寺が隣に立ち、そして隣に立つ。そういえば小野寺はどうやらジュースを持っていたのでふと気になった

「酒飲まないのか？」

「あはは、ちよつと私お酒弱くて。弥柳くんはお酒強いんだっけ？」

「お酒は強い方だぞ。つーか最初は苦手だったけど付き合いをしているうちに慣れていったかな。」

「そっか。」

「そういう小野寺はあつち行かなくていいのか？」

高校のころのいつものメンバーはすでにテレビの前にスタンバイしている。ボクがでるのは中盤なので

「……私はいいの。それにみんなの恋愛話になったからあんまり話についていけない。」

「まじっ？」

「うん。万里花ちゃんもお見合いでいい人見つけたらしくて結婚してもいいって言ってた。つぐみちゃんもアメリカで気になる人がいるらしくて。」

「……へえ、あの二人希望たかそうなんだけどな。宮本と集もうまくいつているらしい

し……桐崎と楽も籍入れたらしいから。本当羨ましいよ。」

「そういう弥柳くんは？」

「ボクは全く。つーか理想が高すぎるんだよなあ。初恋の人以上の人を見つけて決めたのはいんだけどそんな人がいなくて。」

苦笑してしまう。小野寺以上の人が見つからないって未だに何言っているんだろうって思うけど言葉は止まなかった。ハイペース過ぎて少し酔っているのだろうか

「……初恋？」

「どうせ番組予約しているから分かると思うけど小三のころから9年間ずっと小野寺のこと好きだったからな。それがボクの初恋。」

「へえくそうなんだ。……ふえ？」

するとキョトンとしている小野寺。

その顔がおかしくて少し笑ってしまう。何でからかうようにもう一度同じことを答える

「小学校から高校の時までずっと好きだったんだよ。知らなかっただろ？」

「へ？わ、わたし？」

「……小野寺鈍感だし一条のこと好きだったから入る暇なかったけどな。つーか誰も気づいてなかったと思う。俺も他の人との噂を流されたことがあったしな。」

実際ボク自身諦めていたんのもあったから言葉はスツと出てきた。

「……高校の時の話だし流せって。思い出話だろ。」

「えっ？あつ。う、うん。って何でそんなに平然としているの？」

「だから昔の話で元から諦めていたからな。一条が好きだったのバレバレだったし。」

「……うう。ルリちゃんも言ってた。」

「つーか一条人気だったしな。だから一条ハーレムっていう言葉でできるくらいだったかな。まあ誰にでも優しくしてやる時はやる奴だったし。別に惚れてもおかしくはないだろうしな。」

羨ましくないといえば嘘になる。でも小野寺と会った時から恐らく自分と同じような感じだと思っていた。

小野寺もおそらく未だに一条以上に好きな人を見つけるのに苦労しているんだろう。

「そーいや。小野寺の方は仕事どうなの？」

「わ、私？私はケーキデザイナーをやっているんだ。最近までは一条さんと桐崎さんのウエディングケーキをデザインしているから。」

「へえ。ウエディングケーキ作り始めているのか。…あいつら結婚式も早そうだな。」

「そうだね。でも千棘ちゃんたちがいうには来年になりそうだって言ってたよ。」

来年か。早いのか遅いのか正直分からないな。

そう思っているながらも小野寺との会話は尽きることなく自然体で話して、時に笑って。時にからかい小野寺が剥れ、ボクが謝る。

ただどお互いに笑顔で楽しくと話していたせい小野寺は番組を見逃しかなりシヨツクを受けていた。

みんなにいじられカラオケで歌い久々の帰省はとても楽しく。そして有意義な帰省になったのだった

都会のファミレスにて

同窓会が終わって一ヶ月以上が経ち、いつもの日々を送っていた。

仕事を事務職から言われ基本的には全て受け、出演しそしてアルバムを発売の準備期間に入りスタジオで収録が終わった帰り道にファミレスで食事をしている時だった。

「あっ!」

「えっ!」

和風ハンバーグ定食を食べていると小野寺が偶然にも入ってきた

「よう。小野寺。」

「へ? あっ! うん。ひ、久しぶり。」

「お前なんでそんなに慌てているんだよ。」

と少し首を傾げてしまう。

「えっ? あつな、なんでもないよ。」

「何でもないって。……そうには見えないんだけど。」

少し慌てすぎな気がするんだけど。

「えっと一人?」

「今日アルバムの収録だったからな。スタツフは編集で忙しいから一人で飯食べてた。朝一取り直しゼロだったし。元々収録は今日は10曲とただけだったしな。」

「へえ〜アルバムでるんだ。」

「半年後にな。てか立ったままじやなんだし座れば？つーかここ家近いのか？」

「うん。お店から近いから。自炊もするからいつもは。」

やっぱり女子はそういうの得意なのかな。

そんなことを考えていると

「……そういえば、一緒に相席いいかな？今日私一人だから。」

「ん？まあいいけど。小野寺高校生の頃からやっぱり変わってきているよな。なんかい

い方向に。」

「……えっ？」

「何というか、個人的だけど、自分の夢に向かってるって感じがする。小野寺って昔から消極的だったけど桐崎と一条の件から結構動いていただろ？元々一条と桐崎が偽物の恋人だったって知っていた一人だろうし。」

「……へ？」

「違うのか？小野寺の高校一年のころだったら恐らく恋人ができたら一条のこと諦めると思っていたし気づいている人は気づいていたぞ。はたから見たら林間学校あたりで

桐崎は一条のことを。文化祭明けあたりで一条は桐崎のことを気にし始めたっぽいけど。修学旅行までは小野寺とくつつくつてずつと思つていたし。」

ボクがそういうと小野寺は席でキョトンとしていた。

「……それって。」

「あゝ。あんまり聞きたくなかったか?」

「ううん。ちよつと聞いてみたいかな。弥柳くんから見て私たちってどうだったの?」

「……そうだな。まあ色々と面倒臭い集団かな。恋愛関係あそこめちやくちやだったし。一条のこと人気つて言つていただろ? でも一条が人気がないつて言つていただけかなり人気だったし。上、下級生で高校は6く7。同学年ならお前ら除いても3く4は一条のこと狙つていた人知つているし。」

すると小野寺はえつて呟く

でもあれ分かりやすかったからな

「まあでも相手が悪いだろ。さすがに小野寺姉妹、桐崎、鶴、そして橘に羽先生だぞ。隠す気あるのかつていうくらいに分かりやすいのに。」

「……へ? 鶴ちゃんと春も?」

「……へ?」

気づいてなかったのか? 小野寺。

てかそれよりも羽先生が一条のこと好きだったのは知っているのか

「……てか注文したら。あくまで僕目線だけど一条って誰にでも優しいからな。……まあ同時にそこが一条の欠点だろうけど。」

「どういふこと？」

「誰にでも優しいってことは特別な人間がないってことだ。それだからこそ人を寄せ付ける。でも拒否はできない。小野寺も高校の時はあつただろうけどそれでも告白はかなり少なかっただろ？ 一条を狙っているって分かりきっていたこともあるけど、それでも小野寺は少し欲がなかったんだよ。いつもフォローして一歩引いていた。それが悪いこととはいえないしそっちの方がいい人もいるけど……一条は結構恋愛に関しては消極的だったからなあ。積極性のある桐崎や橘が有利だっただろうな。」

そう考えると時間っていうアドバンテージを活かしきれなかった小野寺にも責任があつたのかもなあ

「いい青春だったんじゃないの？ ちゃんと告白まで行けたんだろ？」

「う、うん。」

「高校生みたいに告白までいけるわけではないしな。大人になったら告白も考えてしまふし、僕たちの年齢だと結婚のことを考えないといけない。そう考えると学生のころに告白できただけマシだと思ふぞ。」

自傷的に笑ってしまふ。自分の悪い癖だ。

恋愛を既に達観しきっている自分がある

「……まあ。僕からみたら妥当だったかな。桐崎と一条が付き合ってたつていうのは。近い距離を最大限攻め、地道に距離を詰めていった桐崎がすげえだけ。小野寺に関しては恋愛に関してわがままになれなかった。欲がなさ過ぎたんだと思っっているな。」

「……あはは。耳が痛いや。るりちゃんからもそう言われた。」

「まあ。僕も人の事言えないけど。つーか思いつきりブーメランだけど。」

どの口がいうって言いたい。店員さん呼び出しワインを頼む。

こういったことは酒に逃げた方が楽だ。

恋愛なんてもう2度とできる立場じゃない

既にここきて数十分は経過しており、すでに和風ハンバーグは冷えている

なので適当に腹にたまるおつまみを追加注文をとると小野寺も同じくハンバーグを頼む。

「……まあひとつだけ言えるのは僕にとつてはそんな関係も羨ましいって思うかな。自分の周りでは告白したら人間関係ごちゃごちゃになった人も多くいるし。今でも関係を保っているのは本当にその関係がいい思い出になっっているからだろ？なんか桐崎はゴタゴタしてたらしいけど……それでも今では仲がいい親友みたいな関係だろ。いい

ところに落ち着いたんじゃないのか？」

「そうだね。そういう弥柳くんはどうなの？」

「僕は恋愛は捨ててる。正直芸能界入った時点でほぼほぼ諦めたって感じかなあ。正直合わないんだよ。芸能界。華やか過ぎていて。僕はまだ新人だし、特に最近は劇団員のお仕事ももらえるようになったから。恋愛するような暇もないしな。」

「忙しい中ごめん!!」

「いや。こうやって昔の友達と話すの楽しいからいいから。芸能界の話はできないし。こういう飲み会ってどうやっても今の仕事になる場合が多いし。こういう恋バナとか仕事の時にするってことが多いから。」

華やかな芸能界に迷い込み未だに足掻きながら仕事を受けている

その現実には未だギャップを覚えており、慣れてはいない。

「……そういえば弥柳くん。明日って空いてないかな？」

「明日？空いているけど。」

「へ？空いているの？」

驚いたように小野寺は僕を見る

「空いているな。……つーかこういう音楽スタジオで収録した後は仕事入れないように

している。喉休めるときは休めない」と。

「あのさ、春がくれたんだけど水族館一緒にいかないかな?」

「水族館?」

「うん。商店街の懸賞で当たったんだって。昔からよくいく水族館なんだけど。」

「……」

少し考える。明日はゆっくり寝ようって思っていたんだけど

せつかくだからいつか。

「いいぞ。どこ集合?」

「えっ?」

「いや。暇だし。明日平日だから空いていると思うからな。小野寺は?」

「私も今は一条さんと千棘ちゃんのエディングケーキを作っているかな。千棘ちゃん

世界的に有名だから宣伝にもなるし。」

「世間的に注目されているわけか。」

と苦笑してしまう。一躍小野寺も有名になるチャンスってことなのかな。

「そつちも大丈夫? スキャンダルとか。」

「僕のところはゆるいから。もしバレても友達と遊びにいったってそう説明すればいいし。事務所は恋愛自由なものもあるけど。」

「そっか。それなら9時にサツキ町駅集合でどうかな？」

「了解。ついでに連絡先交換しておこうぜ。待ち合わせ場所ですれ違ったら大変だし」
「うんそうだね。」

そう答えるとお互いのスマホでアドレスとSNSアプリの交換をする

この時は思わなかったんだ

既に運命の歯車は動き始めていたことを